守護神ゴーレス

第1話
神話学的駆動装置
守護神ゴーレス
DIVE IN TO THE BLUE

作：みかつきなお

守護神ゴーレス

第1話　神話学的駆動装置　守護神ゴーレス

Dive in to the Blue

作　みかつきなお

沖縄の午後の海は二千年間変わらないコバルトブルーだった。

白い砂浜の海岸線、岩のそそり立つ断崖、水平線の手前を走る沖合いのさんご礁のライン、波の浸食がつくりだしたきのこ岩。

変わらない風景と変わりゆく波のうねり。

打ち寄せるさざ波が人の心の浮き沈みの数々ならば、満ちては引いてゆく干満の移ろいは人の人生の長さ。

年に数度の台風の波は人々の時代の変わり目。

そして人生のスパンを超えて現れる大津波をたとえるならば、それは地球の変革の時代の長さを示しているのかもしれない。

幾多の戦いがこの大地を覆ってきた。数十年前の大規模な地上戦を経たとしても大地は変わらない。しかし人と水は表情を変えながら波のように動きつづける。過去を忘却し、新しい波を作り出してゆく。

舜は高台から海を見ながら時間を感じとった。

「さて、一気に海まで行くか。」

海の見える坂道を夏の制服の少年は自転車を走らせた。

何度も那覇から2時間かけて通った道。

塾のない日はここに通う。最近は土日もここに入り浸りだ。

「僕達の夢がいよいよ叶うんだ。」

夢の人型アクチュエーターの起動実験だ。

世界でまだ大手メーカーでしか生産されていないヒューマノイド大型駆動ロボット機械。

舜は若い自分達で達成されようとしていることに、そしてそれが実現できる可能性を見出して、行動して、実現にむかってきたこれまでのプロセスに納得していた。

後ろからやって来た二人乗りしたバイクの制服の女の子達が手を振っているのをみて舜も手を振った。

「俺も急ごう。」
舜の自転車はさとうきび畑の道へと吸い込まれていった。

海岸の3階建てのプレハブの中。
「裕一くん、もう一度グーとパーだ。繰り返してみよう。」
つなぎ姿の八幡裕一は数台のパソコンの前でシステムコーディネーター比嘉辰巳の指示を聞いていた。
「辰巳さん、俺のシュミレーションだと理想値まで、0・01%。誤差はこれでいいんじゃない。あとは動かしてからじゃないと。」
作業ジャケットにネクタイの比嘉辰巳は計画書をとりあげて言った。
「いや、0・001%だ。」「絶対?」「そう、これは自動車じゃない。
『アクチュエーター』。駆動機械、複雑な人体の模擬装置。

つまり世界でもっとも高度な機械だ。しかも未知の機械。
そして僕らが行ってきた方法は錬金術と呼ばれるかもしれない。神の力だ。

前に舜が倒れた事故。これはおそらく人の心身まで左右する機械だよ。0・001でもまだ安心できない。まだ不安はあるということだ。」
「わかったよ辰巳さん。俺は舜の出した理想値、すなわちパーフェクトに近い数値でないとサブパイロットには不適合なわけだ。」
「すまないが、仮想空間のゴーレスを納得させる数値で可動できなければ、実体での安定した活動が保障できない。すべてが初めてのこと。だから、ベストと最善と安全のバランスを考えるしかないんだ。」
裕一は納得した。「ゴーレスが出来上がって今の仕事。それは俺は『ウォドオベレーション』が任務というわけですね。」「うん、君にその力、預けた。」
辰巳と裕一はお互い見合って親指をたてて合図した。
裕一は右手はパソコンのキーボードを叩き、左手は透明のパネルに手を当てた。透明なパネルの表面にはうすい虹色に囲まれた気泡の数々が手の動きにあわせて動いている。

「シュミレーション続行します。」裕一はヘッドセットを装着した。
パネル上の裕一の左手が動いているが、それは微妙な動きでしかない。だが彼はパソコンの前の操縦桿を握る右手より、左手の方に神経を払っているようだった。
画面とにらみ合ってしばらくすると、画面上のポリゴン図形のアクチュエーターはその右手をもちあげた。
緑色の細かい三角の集合体は右手の形になり、開いて握って、という動きを続けた。続けて歩行、ジャンプ。荷物を持ち上げる。スクワットの動き……。
画面上のアクチュエーターは考えられるいろいろな動きを試してみた。裕一の集中力が切れているのを見計らって言った。
「とりあえず休憩。裕一君おつかれ。」
裕一はヘッドセットを取り外して、肩をたたいてため息をついた。
「はー、でーじにりたんどーや（すげえ疲れたー）。毎度。脳波で動かすのはやはりきついなー。サクサク動かせる舜の集中力には勝てないがいい感じだよ。裕一の脳波接続。理想値まであと0・00021だ。ゴーレスの仮想起動プログラム上では問題はない。でも理想値、ゴーレスの駆動より早く脳内で先に次の動きを作り出せる驚異的な速さは舜しかいない。」
「俺の得意は解析力。『ウォドグラフ』による覚醒値やウォドの流れをみることだね。俺には不服はない。俺は故障したら直すピットクルーでもあるし。」
「そうなんだよね。みんなの『能力』の協力が必要だ。俺の仕事は機械屋。君達はゴーレスの魂を操る仕事。」
「辰巳さんがこれだけのアクチュエーター製作のノウハウを持っていなければ、いくら僕らの能力でもできなかったですよ。
本当の最後の仕上げは舜が動かせるか、今日はあいつ大丈夫かなあ。」
「今日起動できても、その次は第3種大型特殊の認可が目標。沖縄陸運局新特殊車両部あてに色々データ取らなきゃいかんし。ここは引越ししなきゃいかん。まだ頭がいたいなあ。」
「爺さんがいい格納ベースがあるといっていたが、場所を教えてくれないからなあ。いい加減教えてほしいよ。」
「まあ、あの爺さんのことだからびっくりするほど納得させるか……びっくりするほど……呆れるか……。」

「呆れるほうに千点だね。ここも立法院議員時代からの知り合いの渡嘉敷のオジーの計らいでなんとか借りた土地だし。どこまでうちの爺さんが偉いのかよくわからないよ。」

二人が休憩していると、外でバイクが止まる音がした。中型バイクに乗っていたのは夏服のセーラー服と冬服の紺のブレザーの女子高生二人であった。

女の子二人はヘルメットを取った。運転していた子はセミショートのボブで、後ろに乗っていた子はショートめのシャギーだった。

「みずきちゃん。疲れた?」「あなたこそ今日は半袖で飛ばして涼しくないの?」「全然。バイク乗りは涼しい方が好きだから。」

二人が降りようとすると裕一がドアを開けて声をかけた。

「お疲れー。早く入ってきなよ。」

何の気なしにただ手招きをしていたが、小夜子はムッとした顔で言った。

「にーにーよ、とぅるばいじらー（呆けた顔）でみるなー。バイク降りるから向こう向いててよ。エッチ。」

裕一はしょうがなくドアの側をみた。

「やったー（おまえら）のスカートが短すぎるばーよ。」

小夜子はまたがっていたバイクを降りてみずきに手を差し伸べてみずきはステップに足を乗せて降りた。

「えースケベにーにー二人おりたよー。」

「小夜子、舜は向かっているか?」

「坂の上の方で海をみてた。もうすぐ来るんじゃない?」

「みずきちゃん。南さんとかは来るかな。」

「南さんと小雪姉ちゃんは7時くらいかな。あと稲田さんたちもかぎつけてくるんじゃない?」

裕一は手をたたいた。

「よっしゃ、そろそろ準備するか。」

裕一につづいて小夜子とみずきは中に入った。

そして裕一は海側の大型シャッターの前の機械が並ぶブースの電気をつけた。

3階まで吹き抜けのスペースがあらわになった。

１０ｍ四方のブルーシート４枚に覆われた物体がスポットライトに照らされて現れた。クレーンの電源を入れて、ブルーシートの端に結ばれたロープが巻き取られて持ち上げられていく。

次第に足と脚部がみえてきた。幅８０センチ長径１２０センチほどの足部はブーツ型の形状で、足部と脛部の隙間からわずかばかり本体の人工筋肉が垣間見える。脚部全体が現れると、黒い巨人は片立て膝で座っていることがわかる。そして脚部の外装は鎧のようになっていた。黒い脛当ては朱色の紐で結ばれたような形だが、溶接された突起であり、もちろん紐ではない。

八幡小夜子は葦原みずきの肩を組んで作業をみつめた。

「みずきちゃん、やっぱゴーちゃんはいつ見てもかっこいいよね。」

「うん。みんなで作った。これが一番の喜び。」

持ち上げられたシートはクレーンのウインチ部がレールを移動して作業フロアの端のローラーに巻きとられてゆく。

黒光りする躯体の全容があらわになった。

黒い鎧の武者。左肩袖に螺鈿細工風の玉虫色の輝きを放つ龍の文様が輝いている。兜の裏側は深い紅色に塗られている。各部装甲の裏側が赤系統で統一されている点、琉球漆器の重厚感へのこだわりが感じられる。

裕一はその顔面を見つめた。

顔面は兜の下上半分を覆う半透明のバイザーに覆われ、薄くメインカメラの光沢が薄く映りこんでいる。

なぜか見つめられているような気がする。

裕一はのっぺらぼうな顔の目がある辺りの造形を見ると不安になった。

半透明のバイザーの顔の上半分と口鼻のない下半分。それは兜のデザインにインパクトを押されて余り存在感が薄い気がする。

葦原氏の設計図通りだ。オリジナルで顔は顔らしくしたほうがよかったかもしれない。

でもこの顔が機械として扱える。葦原氏の決めたゴーレスの顔。

これでいいのだ。これが完成形なのだ。

４人はただじっとゴーレスを見つめた。

舜が今日動かして外で作業できれば、商業用アクチュエーターとしての第一歩が進められる。

みんなで作った民間用初、完全実用化初の大型人型アクチュエーターになるはずだった。

「さて、舜が来る前に起動準備しよう。」

比嘉辰巳はさっそくパソコンの並んだブースに座った。

裕一は注水タンクのメーターをチェックした。

小夜子はタンクの裏にまわった。タンクの横から小夜子が言った。

「つなぎ上に着るからみるなよー」「だからなんで妹のを俺が見て楽しいのかよ。」

みずきは奥の4畳半の和室に入り、お茶をみんなに用意した。

一番茶を仏壇に供えて線香を立て、祈った。

「辰巳さん注水開始します。」「了解。」

裕一と小夜子はきつく閉めたバルブのハンドルを二人で回した。

水がゴーレスの背部の給水口へ透明なホースをつたって注ぎ込まれてゆく。

「注水率５０％。ポットの加圧加熱開始。」

「OK、小夜子たのんだ。俺はモニターを確認する。」

裕一はパソコンの前に座った。

「遅くなってごめん。」……「え、」

舜が入ってきたがその声はポンプの回転音にかき消され、彼らの集中力を邪魔するものにさえならなかった。彼はパイプ椅子を広げて、みんなの作業を見守っていた。

タンク横のパラメーターを見て、

「注水率７５％、どう？　にーにー、エンジンは？　調子いい？」

「いいぜ、だんだんチムワサワサーからチムドンドンに移行中！」裕一はニヤニヤしながらオシログラフをみていた。辰巳が呆れた顔で言った。

「おいおい、数値と用語で言えよ。チムワサワサーが加圧準備段階でチムドンドンがアクチュエーター加圧域に移行中なんだろ。そろそろ……。」

裕一は後ろを振り返って。舜を指差した。

「おい舜、ゴーレスのチム（肝）がワサワサーからドンドンに変わって、エネルギー充填１２０％で波動砲の準備オッケーだ！　ゴーレスの親方はまちかんてぃー（待ちぼうけ）してるよ。Go dive in だぜ！」

裕一はスマイルで親指を立てて親指を後ろの舜に向けた。

辰巳が用語の注意をした。「もー方言じゃなくて専門用語でやってよ。」「いいあんに、ノリよ、ノリ。」「……もう……今は通じているからいいか。」

「裕一、辰巳さん、さよちゃん、みずき、乗るときが来ました。」

折りたたみ机とパイプ椅子が雑然と置かれタコ足配線をあちこちテーピングしたコントロールブースの横を通り抜け、ゴーレスの前に進む。

パイプ椅子や折りたたみ机が並び、たくさんのケーブルがテーピングで止められている通称『コントロールルーム』を通り抜けてゴーレスの鎮座するフロアに出た。

舜は軽々とパーツの隙間に足をのせて胸部まで上り、ハッチを空けた。鎧の胸の装甲板が観音開きに開かれると、裏側の朱色が明るく目に飛び込んできた。その内側に現れたのが薄い半円形のコクピット格納ハッチだ。

舜が横のテンプレートから暗証番号を入力すると、まぶたが開くように下部から上部にスライドしてコクピットが現れた。舜は振り返ってみんなに親指を立てて「グー」のサインをだした。みんな「グー」で返した。

舜が操縦席にすわり、電源キーを差し込むと、横、上部、足元、合計6枚の大型液晶パネルが、ゴーレス頭部から見た映像を映し出していた。そしてその映像に覆いかぶさるように、初期起動コマンドが走るように上方へとひっきりなしにスクロールしていた。

英語やプログラミング言語のスクロールが止まり、日本語の人工音声指示が出た。

＜本人認証を行います。ヘッドセットを装着してください。＞

音声ガイダンスは舜が好きな渋い声のベテラン声優の声を採用した。

「了解。」片耳だけスピーカーと3D眼鏡が付いたヘッドフォン状のヘッドセットを頭に掛けて、深呼吸する。

彼の脳波がデーターとして送られる。

「上運天舜。男性　16歳　首里高校2年生　ゴーレス第一専属パイロット　本人認証いたしました。」

モニターには琉球大学工学部院生である比嘉辰巳が製作したOSの起動画面が表示された。

＼Welcome to Mythologycal Actuator Machine Gardian Gores GARDIAN OS ver1.3 we can do it! ／

『神話学的駆動装置　守護神ゴーレス』この言葉こそゴーレス製作の過程からうまれた言葉だ。
その製作過程、いや「創造行為」が神話なのだから。

裕一や辰巳らが見るメインモニターに表示された数百の分岐のディレクトリーツリーはめまぐるしいスピードで赤から青の表示に変わっていった。

「裕一くん。舜はさすがメインパイロットだな。気持ちがいいほどのオールブルー。」

「レセプターからドーパミン全開！　ナチュラルハイにイッちゃってるね！」

「だから、おめー、用語で言えっての。」

「わかりました。現在、脳波認証 OK。本体 CPU 接続と外部仮想 CPU 相互リンクも OK。機械系は前回より接続が安定している。いいぞ、舜。なんか吹っ切れたか？」

裕一の声がスピーカーから聞こえる。

「ああ、後は『魂の接続』。やってみる。」

すると開いたコクピット前に梯子が架けられた。
上ってきたみずきが顔を出した。いつもの真剣な顔のモードに切り替わっている。涼しげな目で舜を見つめていた。

「そう。最後の仕上げ。『龍の眼』、お願いね。」

みずきは制服のジャケットのポケットから取り出した黄色い袋を舜に手渡した。

「今日は舜の調子いいみたい。」「ありがとう。」

すこし微笑んで、みずきは降りていった。

舜は袋をあけて、丸い水晶玉を取り出した。

「龍の眼。お願いする。」

コクピットの中央、操縦桿の前の丸いくぼみに龍の目と呼ばれた水晶玉をセットした。

そして舜は左側に設置されたゼリーのような液体のシャーレに手を載せた。

「上運天舜、最終段階に入る。」

コクピットの内壁が閉められ、外側の装甲壁も閉じられた。

完全に閉鎖された空間で、一面のモニターに映されていたのは海の中の映像だ。

「今から行く、海の底。心の底。ダイブイン！」
「いけ！　ダイブイン。いまの舜なら出来る！」
……海だ。僕の心は海を見る渚にいるんだ。
舜の心は心象世界『イメの渚』に立っている自分を感じていた。
ここは自分の夢と向こう側の世界との境目。
彼の目には朝日が昇る沖縄の海のど真ん中に立っている。
大海に浮かぶ小さな岩場。朝日を太平洋に望み、遠くに沖縄本島らしき島影が見える岩場。
……ニライカナイ。久高島よりも遠くの東の海の彼方にある神々の世界。沖縄人の共有するイメージの風景かもしれない。
舜は飛び込み、珊瑚の海へと潜っていった。
「僕は泳げない。でもここでは縦横無尽に泳げるんだ。いでよ、ゴーレスの操縦席。」
珊瑚の森に囲まれた窪んだ岩場の奥に、フジツボに覆われた座席があった。
「前回、ここで苦しくなった。ここで動かしているうちに苦しくなった。でも今回はあれがある。」
「女神からもらったんだ、水の魂。これをセットすれば、この心の世界も起動する。」
ポケットからさきほどの龍の魂と同じような玉を操縦席の前にセットした。
「さあ、マブイグミ（魂込め）したぞ。ゴーレスの魂よ、動け、」
がしっと音がした。周りの石灰質の大地にヒビが入った。
椅子の目の前の水の魂が光っている。
「よし、動け。……動かない気がする。このまえはすぐ現実にもどって苦しくなったけど……。
俺は動かなくてもいいのかな……。ああ、なんだかこの世界はそのままいたい……。」
舜の目の前には頭上の波間にゆらゆらと輝く太陽があった。
ああ、美しい。神の世界……ここがニライカナイなのだ……。静寂な青い世界で舜の心はとろけてしまいそうだった。
コントロールルームでは脳波の数値に慌てていた。
「ダイブインしてから脳波がアルファ波が低下、シータ

波増加。このままだと眠ってしまう。裕一君。微電流でショックを。」

「ああ、ここで自発呼吸の低下で前回みたいに呼吸困難になるなよ、起きろ、舜！」マイクにどなりつけた。

小夜子が梯子を持ってきて、舜のコクピットのドアを蹴りだした。

「えー舜、起きろ！　ここでとうるばったら死ぬよー。」小夜子が装甲板を開こうとすると、

その様子を見たみずきが小夜子を制止した。

「待って、これは彼の通過儀礼。これを超えなければ彼は戦士にはなれない。ゴーレスを我がものとすることはできないわ。」小夜子は降りてきて、梯子を取り外した。

みずきはゴーレスの前に香炉を持ってきて、線香をたてて祈った。

「水底より生まれしオノゴロを汝が水とし、海より生まれ岩となり土となる珊瑚の肉を纏い、深き底より湧き出るマグマのチムを持ち、天より授かる稲妻の頭を持つもの、ゴーレスよ。汝が心として上運天舜を受け入れるか。」

ゴーレスは微妙に動いてきた。

「おお、シータ波が減ってきた。いいぞ彼の意識は元にもどりそうだ。」

ダイブインした舜は青の世界のまどろみの中で、目が覚めてきた。「目を覚ましてゴーレスを動かさなくては。力がはいらない……水の魂、龍の魂よ……。」

香炉の前でその煙を体に浴びせるようにしていたみずきは裕一に言った。

「裕一さん。私もダイブインする。『内側』からサポートする。」

「ああ、気をつけろ。」

みずきはネクタイを緩め、胸元のボタンを第二ボタンまで開けると首から掛けていた数珠状ネックレスを外した。そして、そのネックレスの先にある勾玉を握りしめた。小夜子がヘッドセットをみずきの頭につけた。

「葦原みずきダイブインする。」

みずきは煙立つ香炉に手をあわせて正座で祈りながら、肩の力が少し抜けて目を閉じた。

ゴーレスの足元に黒い沖縄線香の煙がまっすぐ昇っていった。

つづく